

8月7日（火）

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 川上弘美さんWS 連載中「三度目の恋」と平安時代の生活

### 1, 平成30年度 1回目のご来館

昨年度からAIRとしてないじえる芸術共創ラボに参加して下さっている川上弘美さんと、今年度はじめてのワークショップを行いました。

現在『婦人公論』で川上さんが連載中の小説「三度目の恋」は、『伊勢物語』をモチーフにした作品です。

川上さんは「三度目の恋」執筆のために、平安時代の生活（暗さ、明るさや、どのように話していたのか、何を食べていたのかなど）をお知りになりたいとのことで、平安時代の文学を専門としておられる青木賜鶴子先生（大阪府立大学教授）、小山順子先生（京都女子大学教授）、岡田貴憲先生（当館特任助教）をお招きし、様々な資料を参照しながら具体的なイメージを追求してゆきました。



### 2, 平安時代のことば

たとえば川上さんは時代設定を昔にした作品を書かれる際、時代ごとにつかわれていた単語を調べることのできる辞書を使われることがあるそうですが、語尾は？帝と公家の言葉は一緒？この身分とこの身分の人が話す時にはどんな感じ？等と、細かな疑問に対する答えが得られず困ることもあるのだとか。

そこで、平安時代の言葉について検討してみることになりました。

ただし「三度目の恋」は基本的に現代日本語で執筆しておられるため、ニュアンスが出るのが大切なのだとか。そのため、京都弁を少

8月7日(火)

しいれてはどうだろうと考えておられるそうです。しっかりとした理解をフィクションの要所要所にちりばめるのですね。

業平は様々なところへ行きますが、宮中が舞台になる時には京都ですから、最も適当かもしれません。

「だ」を「や」にするとか、「～できない」を「ようせえへん」にするとか、「～する」を「～しはる」にするとか……東京ご出身の川上さんと一緒に、ひとしきり京都弁らしさについて考え、参考として、現代の京ことばに『源氏物語』を翻訳した書籍<sup>1</sup>のご紹介もさせていただきます。

### 3, 登場人物の人間関係とことば

また川上さんは、登場人物たちがお互いにどのように呼びかけ合っているのかについても考えを巡らせておられます。

たとえば業平は親しくしていた<sup>これたか</sup>惟喬親王と話すときにどのような言葉で呼びかけていたのでしょうか。そしてそれは現代語にする<sup>いつき</sup>とどのような言葉があてはまるのでしょうか。

やはり親王から業平へ呼びかける時には官位だったのでは、というのが妥当な解釈のようですが、それでは現代語にし辛い、ということ、親王から業平へはなしかける際には「あなた」、業平からは

「親王さま」とするのが良いのではというところに落ち着きました。

どちらも名前を呼ばないのは、当時名前には特別な力があり、簡単に本名を口に出すことがはばかられたためです。

それでは自分の妻や恋人にはどのように呼びかけるのでしょうか。

『伊勢物語』にはたくさんの女君が登場します。業平がモデルになっていると思われる「三度目の恋」のナーちゃんのまわりにも、たくさんの女の人が描かれます。それぞれの関係性によって呼び名も違うのでしょうか。

先生方によると、基本的には女の人は愛称で呼ばれるのでは、とのこと。『源氏物語』の女君たちも、そういえば「紫の君」「明石の君」「六条の御息所」など、住まいや縁あるものから名づけられていますね。

『伊勢物語』には伊勢の斎宮や二条の後と思われる、身分の高い女性も登場します。伊勢の斎宮は「斎<sup>いつき</sup>の宮様」、二条の後は「姫様」あたりが相応しいのでは、という提案もなされました。

名前で呼ばれるのは、おそらく本妻だけなのです。それは、当時の結婚が家と家の結びつきによるものであるという文化的背景が影響しています。本妻と他の女君との違いは明確にあるのですね。

<sup>1</sup> 中井和子『現代京ことば訳 源氏物語〈1〉』(大修館書店、

2005)

8月7日（火）

女性からは業平をどう呼ぶのか、という問題ですが、女の人からは話しかけないのではないかということで、仮に呼ぶとすると「あなた様」位ではないか、と結論付けられました。

作品中に描かれていない部分も、時代背景や身分の違い、立場の違いを考慮して、みんなで知恵を出しながら現代語に落とし込んでゆく過程はとても楽しいものでした。



#### 4, 食事と宮中での生活

川上さんのご関心は、食事の具体的な在り方にも向かっているそうです。作品を執筆する時、食事シーンを描くのが好きだという川上さん。そういえば、川上さんの作品では登場人物たちが食べてい

るものが、おかずのひとつひとつにいたるまで詳細に描かれていて、なんとなくその人の生活を想像させるところがあります。

ところが平安時代の文学では、食事に関する描写は俗世的であるためか、ほとんど描かれていません。特に女性の食事シーンについては例を見付けるのが難しいほどです。

先生方からは、食事は男女共には食べないのではないか、という意見や、宮中では主人の下がりものをいただいている描写がある、という意見がありました。特に宮中での女房の生活については、ご自身の宮仕え経験を元にして描かれた岩佐美代子氏のエッセイ<sup>2</sup>にも同様の場面があるとのことで、参考文献として紹介がありました。

川上さんは、多くはなくとも、男女で食事を共にすることや、宮中での食事の在り方が分かったので、好きな食事のシーンが書けそうですと喜んでおられました。

※後日、WSに参加された先生方から様々な補足がありました。その中で、岡田先生からは夫婦の食事について以下のような補足をいただきました。

『落窪物語』巻一、落窪姫君のもとに少将が通うようになり、三

<sup>2</sup> 『宮廷に生きる一天皇と女房と』『内親王ものがたり』『宮廷の春

秋一歌がたり、女房がたり』

8月7日（火）

日夜の餅をすませた翌朝、お付きの女童（あこぎ）が二人のもとに食事を持参する場面があります。

（それまで留守にしていた継母達が帰宅し、食事が用意されたので、あこぎがそこからくすねたもの）

同場面は新全集の69頁に

「御台まゐりに来ぬ。物のくさはひ並びたれば…」

（少将と姫君に御食膳を差し上げに来た。いろいろの種類のご馳走が並んでいるので…）

とあり、男女が食事をともにする様子を描いた例と言えそうです。夫婦の場合には、同室で食事をとることもあったかと想像されます。

同場面ではその後、姫君の全く手を付けなかった食事と、少将の残り物とを、あこぎが回収して調理し直し、夫の帯刀に食べさせる様子も描かれています。

これを受けた川上さんからは、「妻と夫が並んで食べることもある、という描写、心強いです」とのコメントをいただきました。

「三度目の恋」の中で、どのように食事の場面が登場するのか、大変楽しみです。

## 5, 手紙のセンス

平安貴族の恋愛にとってたいせつなのが、和歌（手紙）のやりとりです。歌を贈り合う際に、どのような紙を使っていたのか。どのように折っていたのか。川上さんが疑問に感じておられた点です。

ここでは『伊勢物語』本文のほかにも、装束の重ねの色目が説明されている『源氏物語図典』（小学館、1997年）が役立ちました。

業平は歌を送る際、何種類かの色紙を使い重ねの色目を表現していたそうです。実際にどのような色目なのか確認しつつ、川上さんは「（業平は）お洒落な男ね」とにっこり。

顔を見ずに手紙のやりとりだけで相手の教養や人柄をはかった時代、さぞそのセンスが際立ったことでしょう。





8月7日（火）

した。

「三度目の恋」の中で、業平の造形はナーちゃんだけでなく、高丘さんという、梨子の同志のような男性の中にも現れます。川上さんの中での業平像は、ご自身の作品世界で新たな人生を自在に生きているのでしょうか。

各登場人物像や、川上さんの『伊勢物語』解釈については、是非改めてうかがってみたいところです。

